

品種の紹介

暖地に適した赤大豆品種「ふくあかね」

【開発の背景】

大豆の中でも黒大豆や青大豆など、一般的な黄大豆と比べ、有色の種皮を有する色豆は地域の特産品として利用しやすく、生産規模は小さいながらもブランドとして定着しています。しかし、「丹波黒」、「いわいくろ」など一部の黒大豆を除いては栽培面積も少なく、また、栽培適地でない品種が作付けされる場合もあり、収量や品質が不安定となる要因となっています。そのため、不作の年には原料確保が難しく、販売期間や販売品目の縮小を余儀なくされています。このような状況を改善するため、これまでに当センターでは青大豆「キヨミドリ」や黒大豆「クロダマル」を育成し、九州を中心に普及を進めています。

今回、これまで暖地での栽培に適した優良品種がなく、生産者、実需者から育成を強く要望されていた赤大豆の新品種「ふくあかね」を2018年に育成したので、その特性について紹介します。

【品種の特徴】

「ふくあかね」は在来の赤大豆「竹田在来87E」を母とし、大粒の黄大豆育成系統「九交980-11」を父とする交配組合せから育成された、暖地での栽培に適した初の赤大豆品種です。

「ふくあかね」の成熟期は九州の標準的な栽培では、11月10日前後となり、「クロダマル」より早熟で、子実収量は「クロダマル」とほぼ同程度です。子実の大きさは「ふくあかね」の交配親「竹田在来87E」や熊本県下で栽培されている在来の赤大豆「紅大豆」に比べ大きく、光沢のある、明るい赤色をしています（写真1）。この子実の赤色を活かし、甘納豆、煎り豆、豆腐、ゆば、煮豆などの作成が可能です（写真2、3）。

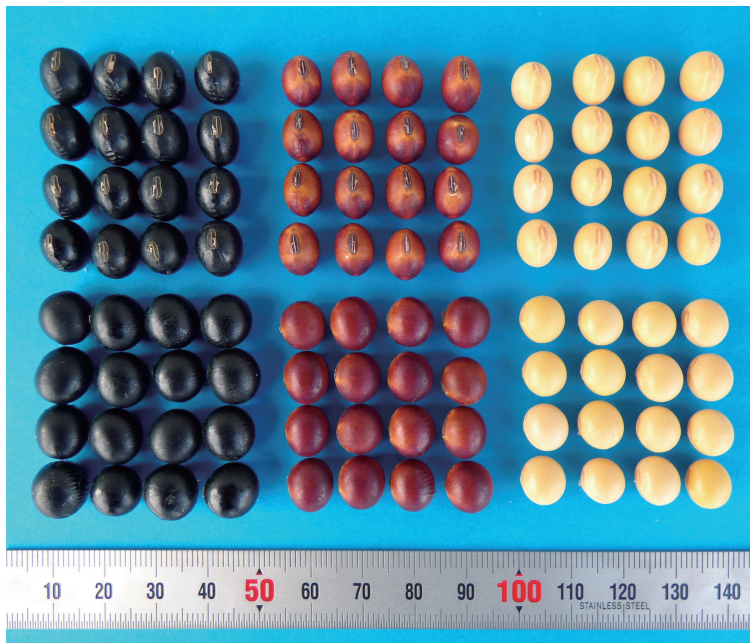
【栽培上の留意点】

「クロダマル」「フクユタカ」より草丈が長く、やや倒伏しやすいので、密植にせず、中耕・培土を適期に行うようにして下さい。また、青立ち株の発生がやや多い傾向にあり、適切な土壌水分管理や害虫防除に心がけて下さい。

【おわりに】

「ふくあかね」は、熊本県下で「紅大豆」を生産する2グループでも試作を行った結果、収量性や子実品質が「紅大豆」より優れていたことから、「ふくあかね」への置き換え（約4ha）を進めており、「ふくあかね」を使った各種加工品が物産館等で販売されています。

【作物開発利用研究領域 高橋将一】



クロダマル ふくあかね フクユタカ

写真1 子実の外観



写真2 「ふくあかね」のゆば豆腐



ふくあかね トヨムスメ
(黄大豆)

写真3 煮豆